

スーパースーパーグローバル大学創成支援事業 事後評価調書（令和6年度）概要

令和6年8月21日

京都大学ジャパングートウェイ構想外部評価委員会

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



【Ⅰ.事業全体の取組について】

➤ ジョイントディグリー／ダブルディグリーの設置・運営

- ✓ 数学、化学、医学生命、人文社会科学、環境学、社会健康医学を参加分野とした「スーパーグローバルコース」において、ジョイントディグリー／ダブルディグリー（以下、JD/DDという）プログラムの開発
- ✓ 大学院教育支援機構における優秀な留学生獲得のためのリクルーティング活動、海外渡航助成金（DoGS）の創設

Kyoto iUPの実施と学部教育の国際化

- ✓ 優秀で志高い留学生について学部段階での受入れを行うKyoto iUPの実施
- ✓ 国際高等教育院国際教育プログラムによる国際社会で活躍する日本人学生を養成
- ✓ 外国人教員による英語で学ぶ全学共通科目（E2科目）を2023年現在で340科目整備
- ✓ 指標の語学レベルにあった者が、2013年の72人から2023年に7,994人と大きく伸張

【Ⅱ.事業期間での大学の成長】

- ✓ Kyoto iUPの実施や大学院教育支援機構における留学生リクルーティング活動等により、外国人留学生の数は、事業開始時と比較すると大きく増加（2013年 2,210人→2023年 3,750人）
- ✓ 年俸制やテニュアトラック制等の人事制度や国際高等教育院の外国人教員受入制度設計等による外国人教員等の増加（2013年 439人→2023年 618人）及び外国語による授業科目数の増加（2013年 639科目→2023年 1,481科目）
- ✓ 従前、各研究科で個々に実施してきた留学生のリクルーティングや大学院生の海外渡航の助成などについて、全学を横断した形で行う新組織「大学院教育支援機構」を発足させるなど、数値としては直接表せない面でも成長

特筆すべき成果（グッドプラクティス）（調書10ページ）

【Ⅰ.事業全般について】

➤ ジョイントディグリー／ダブルディグリーの設置・運営

- ✓ 人文・社会科学系において、日本初の人文社会系JD、3大学によるコンソーシアム型のJD、および医学生命分野において世界トップレベル大学との本学初の博士課程JDを設置
- ✓ DDもこれまでに23件開設、世界のトップレベル大学との連携の下で、国際的に質の高い教育を提供

➤ 大学院教育支援機構の設置と国際化推進の取組

- ✓ 大学院に共通する課題等を一元的に対応するための組織として設置
- ✓ アドミッション支援室での留学生リクルートに係るノウハウや独自開発したシステムは大阪大学や広島大学など他大学にも提供
- ✓ 大学院生の海外渡航に係る大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金の創設

➤ Kyoto iUPの実施と国際高等教育院国際教育プログラムの新設

- ✓ 2018年に第1期生3名の受入を開始して以降、拡大を続けており、2023年度の選抜審査では31名（10の国と地域）が最終合格
- ✓ 応募数は2018年に33名であったのが、2023年の選抜では過去最多となる576名（55の国と地域）と大幅に増加するなど、各国・地域や留学生のニーズを確実に把握して展開
- ✓ 日本人の学部学生を対象に、海外留学やKyoto iUP生とのグループワークを組み合わせた「国際高等教育院国際教育プログラム」を2022年から開始

【Ⅱ.コロナ禍への対応について】

- ✓ 海外からのオンライン授業やオンラインでの派遣及び受入プログラムの実施、学生の国際交流が途切れないよう交流イベントの実施
- ✓ コロナ禍で難しかった国内外のフィールドワークの実習教材をVRやドローン映像を活用して作成し、学内のみならず学外でも利用できるよう一般にも無料開放

取組状況① (調書11ページ～)

➤ スーパーグローバルコースの実施体制

- ✓ スーパーグローバルコースについての重要事項を審議する実施運営協議会において総長を議長とすることにより、総長のリーダーシップの下で、事業を推進できる体制としている。
- ✓ スーパーグローバルコースで実施した国際共同学位プログラム（JD／DDプログラム）は、本学の学位の国際通用性を高め、質の保証を担保しており、本構想の主力な取組である

➤ 各分野における取り組み

◆ 人文・社会科学系分野

- ✓ 文学研究科において、2017年に日本初の人文社会系JDプログラムである京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻を開設
- ✓ 経済学研究科において、2019年9月に経済学・経営学系として日本初のコンソーシアム型JDであるグラスゴー大学、バルセロナ大学との3大学によるJDプログラム「京都大学国際連携グローバル経済・地域創造専攻」を設置
- ✓ カリキュラム以外の国際ワークショップや合同フィールド調査等の機会を通じた、他プログラムとの活発な交流

◆ 医学生命系分野

- ✓ 医学研究科において、欧米の世界トップレベル大学との連携による本学初の博士課程JDプログラムを粘り強い協議と交渉を重ねた結果実現し、2018年に京都大学・マギル大学ゲノム医学国際連携専攻を設置

◆ 数学分野

- ✓ 2018年度にコチュテル型のDDプログラムをリヨン高等師範学校との間で締結。また、個々の学生に応じてテーマや指導教員を設定するテラーメイドの共同学位指導を実施

◆ 化学系分野

- ✓ 2019年度ハンブルグ工科大学とのDDプログラム（JDプログラム含む）に向けての協議を行い、連携の第一歩として学生交流に関するMOUを締結
- ✓ 国際ワークショップ、国際学生ワークショップを実施し、海外の研究者や学生が参加して交流できる機会の提供

◆ 社会健康医学分野

- ✓ マヒドン大学、チュラロンコン大学と2019年度にDDプログラムを締結

◆ 環境学系分野

- ✓ 2019年4月に清華大学とのDDプログラムを開設
- ✓ 2019年にマヒドン大学にOn-site laboratoryを設置し、環境問題の現場に近い場所で、学生・研究者間の国際共同研究・教育の実践

財政支援期間終了後を見据えた大学の国際化戦略①（調書77ページ～）

➤ ガバナンス体制の構築

- ✓ スーパーグローバルコースについての重要事項を審議する実施運営協議会は、総長が議長であり、総長のリーダーシップの下で事業を推進できる体制
- ✓ 指定国立大学法人の構想に基づき、欧米の主要大学をモデルにした本学独自のプロボスト制を導入。本学のプロボストは、大学の将来構想、組織改革等の包括的又は組織横断的課題について、戦略を立案するにあたり調整を行うポジションであり、そのため、大学本部と各部局が将来ビジョンを共有し、綿密なコミュニケーションを図るため、プロボストを議長として広く学内から教員が参画する「戦略調整会議」を設置

➤ 国際化の取組

- ✓ 大学院教育支援機構アドミッション支援室での海外留学生リクルーティング活動
- ✓ Kyoto iUP、国際高等教育院国際教育プログラムの実施
- ✓ 外国人教員による英語で行う全学共通科目（E2科目）の整備
- ✓ 大学間MOUの枠を超え、世界を先導する先端研究を推進するため、戦略的パートナーシップを世界の5大学（ウィーン大学、ボルドー大学、チューリヒ大学、ハンブルク大学、国立台湾大学）と締結
- ✓ 海外の大学や研究機関と共同で設置する現地運営型研究室であるOn-site laboratoryを11件設置・運営（右図参照）



財政支援期間終了後を見据えた大学の国際化戦略②（調書77ページ～）

➤ 国際化戦略

- ✓ Kyoto iUPや国際教育プログラム等の取組について拡大・充実を推進していく一方で、特別なプログラムだけに頼るのではなく、普段の学生生活の中で、より多くの外国人留学生や外国人教員と接することで、刺激を受けたり、多文化理解を深めたりさせる国際共修環境を作っていくことが課題
- ✓ 本学では国際卓越研究大学への再申請を目指す中で教育改革の検討を進めており、2024年5月に全学的な教育改革構想を立案するための「京都大学教育改革会議」を設置、その下に国際共修に関するワーキンググループを設置した。E2科目（英語で学ぶ全学共通科目）の履修促進、留学生受け入れのサマースクールへの日本人学生参加など学内資源の有効活用による国際共修環境の整備を検討している

➤ 財源の確保

- ✓ 事業期間終了後も、スーパーグローバルコースなどの取り組みは、大学院教育支援機構に置くスーパーグローバルコース実施運営委員会で運営を行うこととしているほか、学生の海外派遣や外国人教員の招へい等に係る財源については、学内予算（運営費交付金）を確保している
- ✓ 財政基盤を確立させるため、新たな組織「成長戦略本部」を2024年4月に発足。産業界との協働によるイノベーションの創発を加速させるとともに、ファンドレイジング機能と研究成果活用機能の統合によりステークホルダーリレーション構築機能の強化を推進することで、外部資金等を獲得し、財源確保のための体制強化を図る

令和2年度中間評価留意事項への対応①（調書 26ページ）

〔留意事項〕（令和2年度中間評価結果からの転載）

①学士課程において外国人教員の大規模な招へいやそれを活用した外国語の授業の提供に努めているにも関わらず、実態として設定されている学生の留学経験や留学生の受け入れ、外国語能力などの指標の達成に結びついていない。これは、資源の投入量の問題と言うよりも、学習・教育の在り方に関わる大学全体としての設計・指針に課題があると考えられる。自由な学風を推進する上でも、現在進めている実態把握の努力とともに、すべての学士課程の学生に対して、彼らがどのようにすればより自由に世界で活躍でき、そのためにどのような学習等の動機付けを彼らに対してできるのか、抜本的な再検討が望まれる。その上で、達成が困難な指標については、有効で説得的な方策や代替策を明示し、着実に達成することが求められる。

➤ 対応策

- ✓ 総長が議長のスーパーグローバルコース実施運営協議会において、指摘事項を踏まえた総括を行い、今後の事業は総長の任期中の基本方針「－世界に輝く研究大学を目指して－」に基づいて進めることとし、学部教育の国際化に関しては、Kyoto iUPや短期海外留学の促進を実施していくことを明示
- ✓ これまでKyoto iUPの拡充、ジョン万プログラムなどの短期派遣留学プログラムによる学生派遣を実施してきたことに加え、Kyoto iUP生とのグループワークを必須とする科目履修や海外留学などを組み込んだ「国際高等教育院国際教育プログラム」を開始するなど、学部生の海外派遣施策に取り組んでいる。
- ✓ 外国人留学生と日本人学生が共に学習する国際共修環境を整備し、国際マインドをもって、将来、世界で活躍できる人材育成について議論を進めている

令和2年度中間評価留意事項への対応②（調書 26ページ）

〔留意事項〕（令和2年度中間評価結果からの転載）

②本事業について、個々の指標や取組内容の達成努力を超えて、学内構成員の間での共通理解を伴った全学的取り組みになっているかについて、疑問がある。最終年度に向けて、本事業の趣旨や、大学として作成した構想のめざすところを再確認し、学内構成員への明確な説明と対話を通じて共通認識を高め、一体感のある取り組みと達成へとつなげていただきたい。

➤ 対応策

- ✓ 総長を始め全学の教職員が参加して、教育に関して全学的な議論を行う「京都大学全学教育シンポジウム」を毎年実施しており、2021年には本学が直面している教育課題として、カリキュラムと要卒単位のあり方をテーマに、自学自習のための動機づけに繋がる学生の学習自由度について議論を行った
- ✓ この議論の後、各学部においてカリキュラムの改革を含む要卒単位の見直しが議論され、複数の学部・学科で要卒単位を減らすこととなった。本学が将来的にも、引き続き有能な人材を育成していく上で、全学的な問題の提起とその議論を定期的に行っていくことは重要である

その他の取組①

中間評価では学士課程に係る国際化に関する指摘がされたが、本学は全学的に国際化を進めながらも、特に大学院に係る取り組みを重視してきた。ここまで調書における成果指標に関係した取組を説明をしてきたが、他にも以下のような取組も実施している。

➤ スーパーグローバルコースにおける特筆すべき実績の一例

◆ 数学分野

- ✓ インペリアル・カレッジ・ロンドンやスタンフォード大学など、世界トップクラスの大学研究者との共同学位指導を実施。その結果、文科大臣表彰若手科学者賞や日本数学会関係の受賞者などを輩出
- ✓ 世界的に評価の高い5つの大学（ボン大学、京都大学、ENS、ニューヨーク大学、北京大学）との数学ネットワーク学生交流協定「Global Math Network」を2017年に締結し、教員間による意見交換や研究集会、若手研究者や学生の研究交流を実践
- ✓ スーパーグローバルコース事業に関係する科目を全学に展開し、他研究科の学生も受講可能とした大学院横断教育コース「数学・数理科学イノベーション人材育成強化コース」を2024年度から開始する取組の実施

◆ 医学生命分野

- ✓ マギル大学ゲノム医学国際連携専攻とのJDでは、カリキュラムの一部を共同実施し、マギル大学の厳格な審査基準を採用、連名で1つの学位記を出すなど、国際通用性のある教育の質保証を図っている
- ✓ 世界トップレベル大学の教員との共同指導や共同研究による多数の国際共著論文がNature Medicineなどの国際的に上位のジャーナルに掲載されたほか、プログラム履修者による 文科大臣表彰若手科学者賞や日本学術振興会育志賞の受賞や卒業後にマギル大学助教となった者の他、学内外の世界トップレベルの研究機関、製薬会社などで次世代研究者として活躍する者を輩出するなど、国際的なネットワークの拡大に寄与

その他の取組②

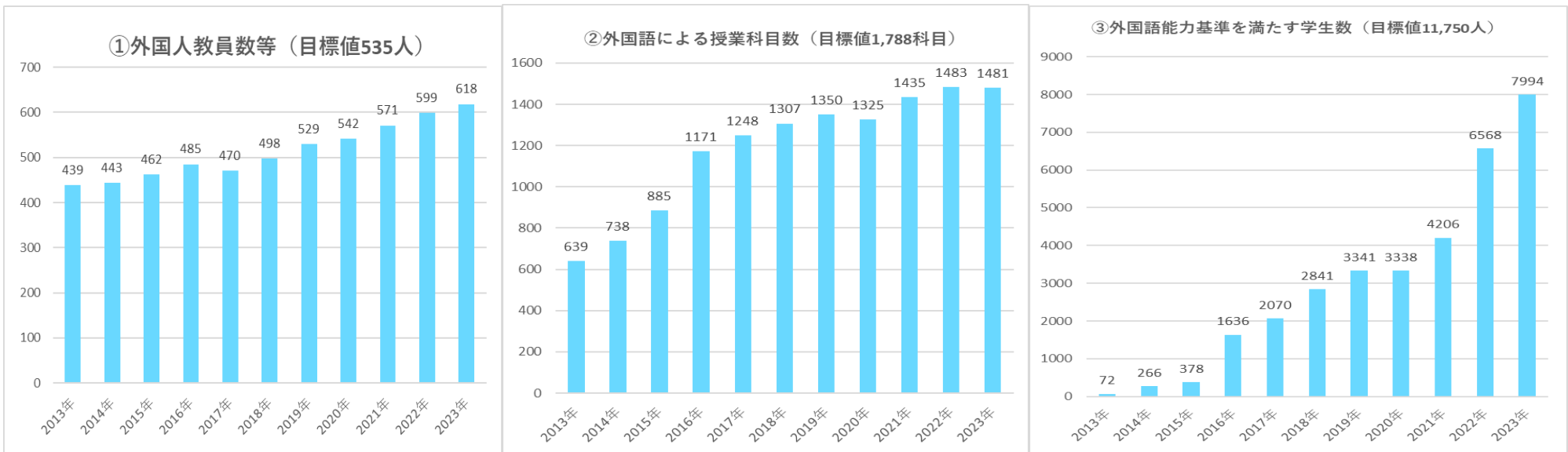
➤ 大学院教育支援機構教育コース

- ◆ 多様化する社会ニーズに応える人材を育成するため、専門領域の壁を越え、幅広いキャリア形成を支援することを目的に、5つのコースを設置した。
- ✓ 産学共同教育コース・・・起業マインド・アントレプレナーシップを発揮して社会に新たな価値を創出することを目指すコース
- ✓ 教育能力向上コース・・・学生の主体的な学びを促す授業設計能力・運営能力を身に付け大学教員としてのキャリアを実現することを目指すコース
- ✓ グローバル生存学コース・・・地球社会・地域社会における安全安心の担保に寄与できるグローバル人材が身に着けるべきコミュニケーション力や自ら課題を発見する能力を涵養することを目指すコース
- ✓ デザイン学コース・・・これからの時代に必要とされるデザイン学の思考方法論の基本を修得することで、複合的かつ複雑な社会問題に取り組むことが可能な人材育成を目指すコース
- ✓ 数学・数理イノベーション人材育成強化コース・・・諸分野における数学の可能性を知る機会を提供し、数学・数理科学を基盤とする分野における幅広い視野を備えた人材の育成や高度な技量を備えた国際人材の育成に重層的に寄与することを目指すコース

➤ KU-STAR Program

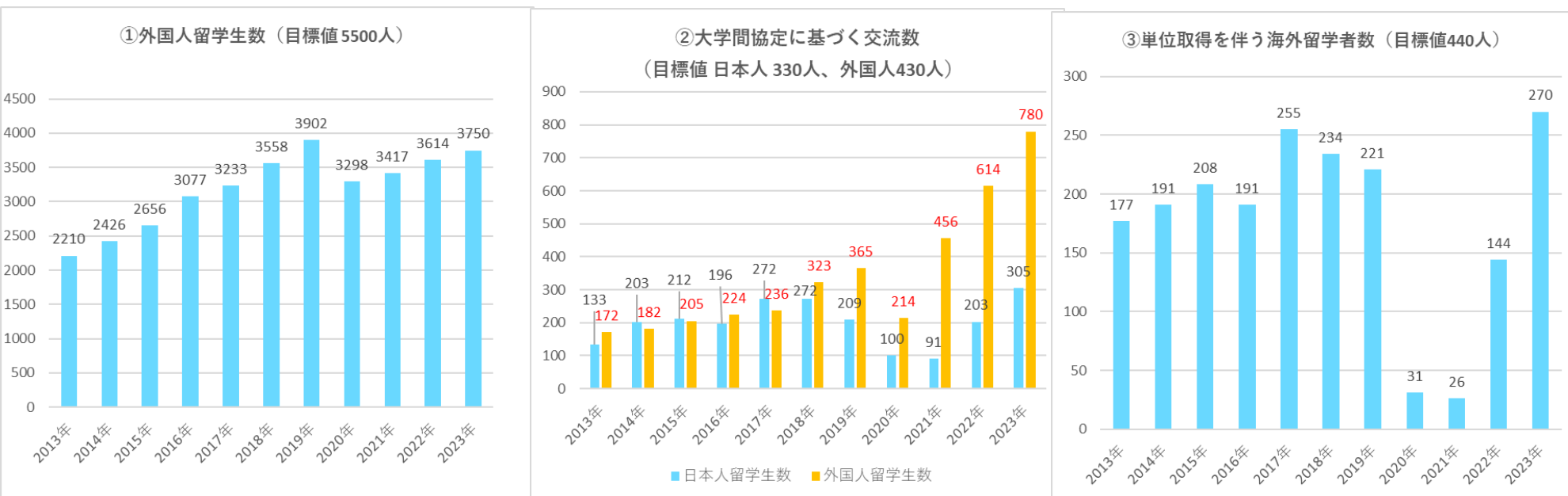
- ✓ 本学の大学院課程に進学する優秀なインド人留学生の増加を目的に、2024年5月に開始した約2か月の短期研究室インターンシッププログラム。6月にはインド工科大学6校から18名の学生が参加し、学内の計16研究室でそれぞれ研究を実施
研究以外にも、日本企業への関心を高めてもらうための企業訪問（島津製作所）やインドとの文化・経済面での交流に注力してきた京都市との連携を目指すため、松井孝治 京都市長を表敬訪問

成果指標データ（資料3-3）のうち主要な指標①（外国人教員、外国語関係の指標）



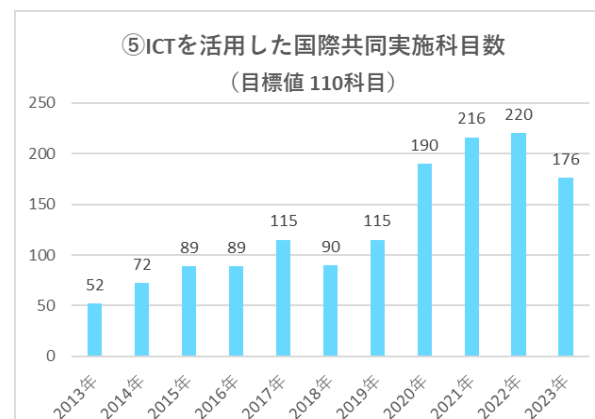
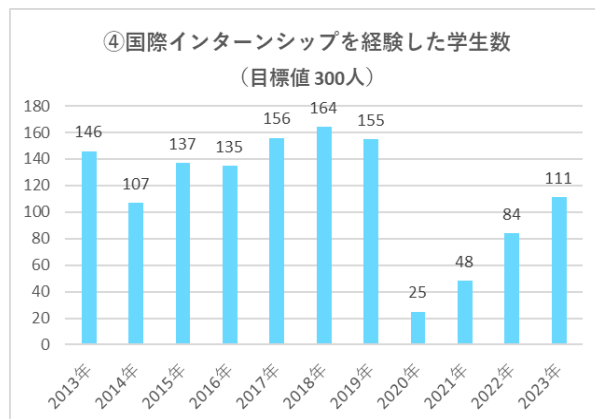
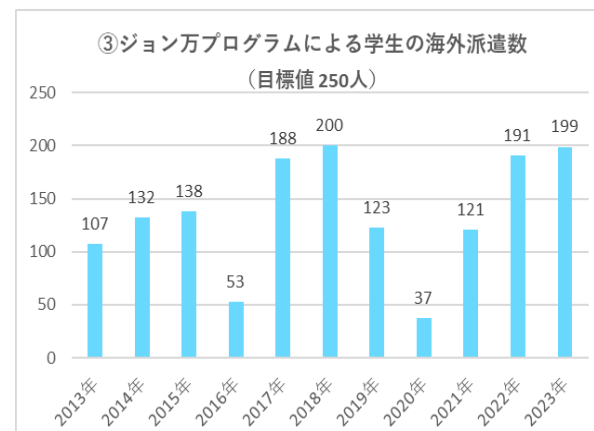
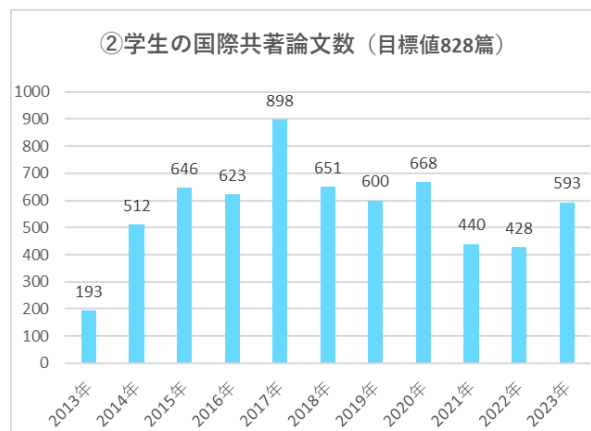
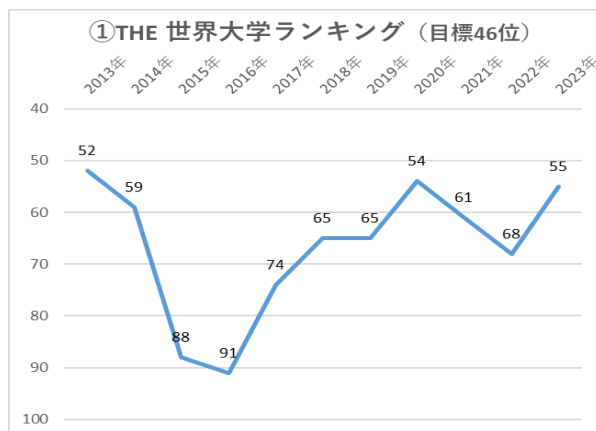
- ✓ 年俸制やテニユアトラック制等の柔軟な人事制度の導入や国際高等教育院の外国人教員受入制度設計等により、外国人教員等数は2013年の439人から2023年の618人に増加
- ✓ それら外国人教員等が実施する外国語による授業科目数が、2013年の639科目から2023年には1481科目に増加
- ✓ 外国語を学ぶ科目に加え、外国語で学ぶ科目も整備した結果、指標の語学レベルにある者が2013年の72人から、2023年には7,994人に増加

成果指標データのうち主要な指標②（留学生数関係の指標）



- ✓ 新型コロナウイルスの影響により、2020年に大きく数字が減っている。現在は、コロナ禍が落ち着いてきたこともあり、徐々に数字も戻ってきている状況
- ✓ 留学生数に関する指標は、②大学間協定に基づく交流数の外国人留学生を除き、目標値は達成できていない
- ✓ 日本人学生の留学に関しては、最近の円安や物価高により財政的負担が急激に増えてきている。経済的事由で留学を断念することがないように、支援の充実が必要

成果指標データのうち主要な指標③（大学独自の成果指標）



- ✓ ①のTHE世界大学ランキングを構成している指標のうち「International Outlook」について、近年数値は上昇しているが（2020年 33.7→2024 45.7）、順位は上昇しておらず（2020年 909位 → 2024年 939位）、引き続き課題である。なお、研究力と教育力に関する大学のReputation（評判）をベースとした「THE World Reputation Rankings 2023」では、本学は世界第24位の高い評価を受けている
- ✓ ②③④の指標については、新型コロナウイルスの影響により、学生の留学機会が減ったことが関係して数値が下がっていると考えられる
- ✓ ⑤の指標は、目標値を達成している。コロナ禍でオンラインでの授業が多くなり、結果的にICTを活用した授業は大きく増加したものと考えられる